●エッセイ　ハギオさんの髪の毛の南北問題

さそうあきら

まんが家はまんがを読むのが遅いに決まってます。

キャラクターの描き方はどうだろうか。このエピソードはストーリーの中でどういう意味を持つのだろう。どうしてここにスクリーントーンをつかわずにカケアミをつかっているのだろう。どういうふうにペンを動かせばこういう表情が描けるのだろう……。

こんなことばかり考えながら読んでいるのです。

萩尾さんの作品を読むときには、当たり前のまんが上の約束事にも重要な意味が含まれているのでさらなる注意が必要です。

たとえば、伝統的にまんがにおいては、わかりやすく人物を描きわけるために髪の毛の色をかえるということがおこなわれてきましたが、萩尾作品では、ことはそう簡単ではありません。

『トーマの心臓』の主人公ユーリは、その一糸乱れぬ黒々とした髪によって際(きわ)だった印象を与えるのですが、ストーリーが進むにつれて、彼がギリシャ系の血筋であることがわかってきます。

——「ぼくはかならず成功するつもりだから／この北国での南国に対するどんな偏見の目にもただ時を待っていればいいのさ」

ユーリのセリフのあとにはこういう注釈がついています。

——「南国」——まばゆい花と夏／朽ちた臭気とぬるい水／怠惰／あこがれと侮蔑…

『訪問者』では妻を殺したグスタフは息子のオスカーを連れて凍った海を見に行きます。ここに出てくる北海の情景は夢に出てきそうなくらい、暗く、寂しい。

ここでふたりはそろって感冒にかかり、犬のシュミットを伝染病で失ってしまうのです。

萩尾さんがヨーロッパを描くときに見せるこうした方角に対する感受性が物語にリアリティを与えていることは間違いありません。

『ローマへの道』では「北国」パリに住む主人公マリオにとって「南国」ローマは父親を殺した母がいる呪われた土地です。しかし恋人になったラエラはローマ生まれで豊かな黒髪をもちイタリア語をしゃべる女——いわばローマをのぞむ窓のような存在だったのです。ここに葛藤が生まれます。

作品の中からラエラの言葉を拾ってみましょう。

——パリとローマがなにが違うって／ローマの空は…青いのよ

——雨も冷たくはない／暖かいの……

雨は作品中パリの冷たさを表現する重要なモチーフになっています。どの場面で雨がつ

かわれているかお確かめください。

豊かなものと貧しいもの。暖かさと冷たさ。明るい光と暗い影。

理性的なものと粗野なもの。差別するものとされるもの……。

このようにヨーロッパを舞台にした萩尾作品では髪の毛を塗り分けるというだけの表現で様々な南北問題を表現しているのです。

この作品の中でも母アンナ・ジェセロは金色の遺髪によって象徴的に語られています。読者は「アンナは老人ホームにいる」という萩尾さんの言葉にだまされて、病弱な老婆をイメージしていたのではないでしょうか。

登場した瞬間、その男性的なキャラクターがわかるアンナの造形の見事さはどうでしょう。

萩尾さんが常に性の問題を親子の関係や未分化な性など、色々な角度から重層的に表現されていることは今さらいうまでもないのですが、この作品の中では、僕はこのアンナの造形に萩尾さんの性に対する感受性が一番露わになっていると思いました。

アンナは確かに愛する息子を守った強い母親でしたが、彼女を男性的に変貌させたのはやはりローマの大らかな空気だったのではないでしょうか。

パリに帰ってきたマリオを迎えるラエラはわざわざこう問いかけるのです。

「お母さんに会えた？／金髪だった？」
この瞬間、読者の中にわだかまっていた南北問題ははじめて解決したことが確認されるのです。

さそうあきら

一九六一年、兵庫県生まれ。まんが家。早大卒。一九八四年「シロイシロイナツヤネン」でデビュー。九九年「神童」で第三回手塚治虫文化賞優秀賞を受賞。そのほか「タマキトヨヒコ君殺人事件」「黒のおねいさん」「I+Iは?」「俺たちに明日はないッス」「トトの世界」「犬犬犬（ドッグ・ドッグ・ドッグ）」（原作・花村萬月）などの作品がある。

ローマへの道

2000年9月10日初版第1刷発行（検印廃止）

著　者 ———— 萩尾望都

発行者 ———— 辻本吉昭

印刷所 ———— 凸版印刷株式会社

発行所 ———— 株式会社　小学館

101-8001　東京都千代田区一ツ橋 2-3-1
振替（00180-1-200）
TEL　販売 03-3230-5749
　　　編集 03-3230-5456

ISBN 4-09-191259-1